

【ものづくり 人づくり 地域づくり】

2014 せいきょう秋の強化月間

食のグローバル化

～自由貿易協定（「TPP」「EPA」協定）の中で

牛肉・豚肉 の安全性を考える

涼しくなるにつれてしゃぶしゃぶや焼き肉が食卓に上がる季節です。

今週 10月1回の生協の商品カタログも「しゃぶしゃぶ特集」。岩瀬さんの豚しゃぶしゃぶセットや、鹿児島坊津黒牛しゃぶしゃぶ用が紹介されています。

常総生協では国産の豚肉・牛肉しか取り扱っていませんが、外食やスーパーでは輸入豚肉・牛肉が安く並んでいます。一般スーパーの店頭では外国産の精肉はまだ棚の1割程度ですが、牛丼やファミレスの食事では8割方が輸入牛肉となっています。さらにコストコなどの外資系スーパーも地域に進出してきています。

今週はTPP（環太平洋パートナーシップ）やEPA（経済連携協定）によるグローバル化の中で、「食の安全」がどのようになっているのか、常総生協は何を見つめ留意しているかをお知らせします。



【食のグローバル化と食肉】

成長ホルモン剤とがんの増加、成長促進剤と神経性障害

自由貿易協定の本質が露わになっている「TPP」については3年前の震災・原発事故の直前までシリーズでその意図や危険性について取り上げ、またJAと共に国会前に徹夜の座り込み行動などを行っていましたが、3.11後、放射能汚染問題に追われている間に、政府は国民にウソを言いながらとうとうTPPへの参加を表示しアメリカに全面譲歩してゆく道に転げ落ちていきます。

TPPは食料・農業・医療・雇用の規制撤廃・緩和によって国民生活が世界企業の市場原理に晒されて破壊される重大な局面となっています。

とりわけ、私たちの「食べ物」はどうなってしまうのか、安全性はどうなのか、生産者は大丈夫か、消費者組合員は安心の食を生産者と共に頑張れるか、生協は耐えられるかも含めて皆で考えなければならない重要な課題に直面しています。

●日豪EPA協定でオーギービーフはさらに安く。そして続くTPP参加でアメリカの牛・豚、乳製品が押し寄せる

日本政府は今年4月、7年も「漂流」していたオーストラリアと「EPA協定」に合意し、7月8日正式調印しました（写真）。



これによってオーギービーフの関税はこの協定で初年度8%（冷凍肉）切り下げられ、いっそう安い牛肉が出回るようになります。

【日豪EPA協定】

オーストラリア産牛肉の関税は、外食産業向け冷凍牛肉は38.5%から初年度△8%の30.5%となり18年後に19.5%へ。

店頭向け冷蔵牛肉は38.5から初年度△6%、15年後23.5%に。

そのほか、ナチュラルチーズや飼料用小麦は現行40%関税が無税に。



そして次に来るのはTPPによる米国産牛・豚・乳製品の関税撤廃です。

TPP参加は今年の10月までに日米合意を迫られており、アメリカはあくまで「例外なき関税撤廃」を主張し、「米国の企業利益のために邪魔なものは食の安全であれ健康・医療、保険であれ一切許さない」という理不尽な圧力をかけてきています。

日本の農業生産基盤の崩壊の問題もありますが、今回はお肉の例から「食の安全性」がどのようにになっているのかを取り上げます。

○牛肉の「成長ホルモン」とがんの増加

牛肉の関税が下がり、オーストラリア産や米国産牛肉が増えると、日本では使用が認可されていない成長ホルモン（エストロゲン）入りの牛肉の輸入がいつそう増えてゆきます。

牛肉の輸入自由化（1991年）豚肉の関税化（1995年）からすでに20年が経過しています。

その間食の欧米化とあわせて日本人の乳がん、子宮がん、卵巣がん、前立腺がん、大腸がんなどの「ホルモン依存性がん」が突出して増加してきました。

2010年に発表された半田康医師（北海道大学公衆衛生）藤田博正医師（北海道対がん協会）らの研究「牛肉中のエストロゲン濃度とホルモン依存性癌発生増加の関連」は、ああ・やっぱり！と衝撃的でした。

市販されている米国産牛と和牛のエストロゲン濃度を測定して比較した研究です。15カ所のスーパーやデパートから購入した牛肉（和牛・米国産牛）のホルモンを調べた結果、エストロゲン濃度の平均値は、米国産牛肉は和牛と比べ、脂身で140倍、赤身部分で600倍でした。「米国産牛肉中のエストロゲン濃度は和牛よりはるかに高く、肥育時に成長促進剤として使用されたホルモン剤の残留があると考えられる」とい

牛肉および癌組織のエストロゲン濃度 —ホルモン剤使用牛肉の摂取とホルモン依存性癌発生増加との関連— 2010年

半田康¹, 藤田博正², 渡辺洋子³, 本間誠次郎³, 金内優典⁴, 加藤秀則⁵, 水上尚典⁴, 岸玲子¹

¹北海道大公衆衛生, ²北海道対がん協会, ³あすか製薬メディカル開発研究部, ⁴北海道大学, ⁵国立病院機構北海道がんセンター

【目的】ホルモン依存性癌は年々増加している。このうち子宮体癌は25年間で8倍、卵巣癌は4倍に増加した。その間、食の欧米化により牛肉消費量は5倍に達し、ホルモン依存性癌の増加に似た増加をしている。国内牛肉消費量の25%をアメリカ産牛肉が占めるが、アメリカではEstradiol 17βを含むホルモン剤（デポー剤）の投与が肉牛へ成長促進目的に行われている。牛肉のホルモン依存性癌への関連を検討した。

【方法】牛肉脂肪（アメリカ産、国産：n = 40, 40）、牛肉赤身（アメリカ産、国産：n = 30, 30）、および、ヒト癌組織（子宮体癌、卵巣癌：n = 50, 50）、ヒト正常組織（子宮内膜、卵巣：n = 25, 25）に含まれるEstradiol 17β（E2）とEstrone（E1）の濃度をLC-MS/MS（測定限界：E2 0.1pg, E1 1.5pg）で定量した。ヒト組織を用いた研究については被験者の同意と倫理委員会の承認を得た。

【成績】アメリカ産牛肉のE2, E1濃度は国産牛肉よりも顕著に高かった。特にアメリカ産牛肉のE2濃度は、脂肪で国産の140倍、赤身で国産の約600倍と極めて高濃度だった。国産牛肉では半数以上の検体がE2, E1濃度ともに測定限界以下だった。子宮体癌組織のE2, E1濃度は正常内膜に比べて進行期I期で高く、III-IV期で低かった。卵巣癌でも同様でI期が最も高濃度だった。

【結論】アメリカ産牛肉は国産牛肉に比べて非常に高濃度のエストロゲンを含有している。一方、組織中のエストロゲン濃度の上昇は子宮体癌、卵巣癌の発生初期に関与していると想定される。したがって、ホルモン剤使用牛肉の摂取量の増加は、ヒトの体内へのエストロゲンの蓄積、濃度上昇を促し、ホルモン依存性癌の発生増加に関連する可能性があるかと推測される。

うものです（研究論文要旨、上記枠内）。

他方、EUでは1989年に米国産牛肉の輸入禁止措置後、乳がん死亡率は大きく低下（イギリスで34.9%減少、アイスランドで44.5%減少、ルクセンブルクで34.1%減少）。

※当初はマンモグラフィーによる予防検診の成果とも考えられましたが、その後マンモグラフィー普及要因は否定されました。



EUは現在も米国産牛肉には成長ホルモンが入っているとして輸入を拒否しています。しかしオーストラリア産は拒否していません。オーストラリアはEU向けの輸出には成長ホルモン未使用を証明しているからです。

ところが、日本向けのオーストラリア産牛肉は、特別な場合を除き、成長ホルモンが入っていることを日本政府・農水省は認めています。

オーギービーフ企業は「世界のマーケットを見据えて、輸出先の需要と好みにあわせて肉牛を仕上げ」、アメリカ牛のBSE問題をきっかけに、トレーサビリティを強化し、ここぞとばかりにシェアを拡大し、日本の牛肉消費市場の43%を確保するに至りました。

他方、日本車のオーストラリアへの輸出は完成車輸出額の75%が即時関税撤廃され、残る25%の完成車と部品は3年間で完全撤廃され、日本の自動車企業は儲けられると歓迎です。

いくらトレーサビリティと言っても、食の安全抜き相互の企業の利益をバーター取引するものでしかありません。

※「日本とオーストラリアを結ぶ”絆”オーギー・ビーフ」という宣伝パンフレットがあります。そこには「日本で食べられている牛肉の4割以上がオーギー・ビーフ、”おいしさ””安全性””ヘルシーさ”で選ばれつづけています」として、イオン、日本缶詰協会とならんで、元日本生協連理事・全国消費者団体連絡会から先の女性消費者庁長官となった阿南久さんの推薦の言葉がのっています。

そして「牛肉マーケティング戦略」として「ターゲットは国際市場」と謳われています。

アメリカと同様に先住民を駆逐し、ウラン採掘で多くの被ばくをもたらしてそのウランを輸入する日本、そしてオーストラリアの国民とは別に、その国の企業が世界戦略で相手に応じてホルモン剤使用を使い分けたり・・・そして日本の消費者を代表する女性までもが、国民の健康よりもこの一連の世界企業戦略に乗せられてゆく現実、国際原子カムの構図と良く似ています。

※外国産の牛乳・乳製品（チーズ・バター・ヨーグルト）のモンサント社遺伝子組み換え牛成長ホルモン「r-BST」の残留については別途紹介します。

●筋肉成長促進剤「塩酸ラクトパミン」

米国・カナダ・メキシコ・ブラジル・オーストラリアなどで広く使用されている豚や牛の飼料添加物に「ラクトパミン」という薬があります。興奮剤・成長促進剤として、豚の仕上期にエサに混ぜると筋肉の成長を促進して肉の赤身が増え、体重も増えて飼料も12kgも節約できる薬です。



人体には吐き気、めまい、無気力、手が震えるなどの中毒症状があり、特に心臓病や高血圧の患者への影響があるとされ、これもやはりEUでは使用が禁止され、輸入肉も厳しく規制されています。

上海では2010年にラクトパミンを含有する米国の豚肉を食べた300人あまりが中毒を起こしたことから米国産食肉を禁止。台湾でも同様のことがあり、台湾吉野屋も2012年に牛丼メニューを全面停止。(その後台湾政府は条件付きでラクトパミン使用の米国産牛肉を認めた)

ラクトパミン問題は政治的にも使われ、中国は2007年のメラミン牛乳事件で中国製品が米国からボイコットされたことに対抗してラクトパミン使用の米国産豚肉を大幅制限する措置を講じました。中国の食品事件もアメリカの食料政策も似たようなものです。ロシアが米国に対してラクトパミンを添加しない飼料で育てた牛豚の供給を求めた事に対して、米国の食肉輸出連合は2012年9月よりロシアへの牛豚の輸出禁止で対抗する動きを示し協議にもつれ込んでいます。

アメリカの食品医薬品局(FDA)の報告書は、2002～2011年までの9年間でラクトパミン添加の飼料を食べた豚が病気にかかったり死亡した数が21万頭に上り、動き回りすぎる、身震いする、歩けないなどの症状が出て、他の動物用医薬品より罹患率・致死率が高いことが報告されました。米国の大学の研究でもラクトパミン添加飼料を食べた豚は興奮しやすい上に血圧も高くなり、急死する率も高いと報告しています。

わが国日本は、国内での使用は禁止していますが、輸入肉については残留基準値を50ppb(米国基準は10ppb)として対応。しかし検疫でどの程度検査されているか一向に明らかにされていません。これだけ輸入品が増えているのに、検疫体制はほとんど充実されておらず、農薬やこうした動物医薬品の水際検査ができる状態ではありません。

●BSEの規制緩和

そしてBSE(牛海面状脳症)をめぐる米国産牛肉の輸入条件は、2011年11月当時の野田首相がAPECハワイ会談で日本がTPPに入れてもらいたいと意志表明するための手土産のためにアメリカから非関税障壁と攻撃され続けた

アメリカ産輸入牛肉全頭検査を止め、輸入は20ヶ月齢以下から30ヶ月齢以下に緩和され、とうとう48ヶ月齢以下まで基準を緩和してしまいました。

BSEは24ヶ月齢の牛の発症例も確認されており、しかもアメリカのBSE検査率はわずか1%程度。わたしたちの政府は国民の健康よりもアメリカのご機嫌取りに終止しており、情けない限りです。

レモンやオレンジなどのポストハーベスト(収穫後の農薬)の防カビ剤の安全審査緩和も、もう日米二国間協議で自主的に譲り渡しています(追ってこの問題も松永さんのレモンを紹介するときに解説する予定です)。

日本の軽自動車の自動車税が低いからアメ車が輸出できないんだとアメリカから言われれば軽自動車の税金を上げたり、自動車の安全基準を緩めて輸入検査を簡略化したり、がん保険市場を米国に明け渡すために全国の郵便局で米国保険会社のがん保険を販売するという信じられないことまでおこない、医療では自由診療を拡大して米国医療企業の進出を認めたり、もうアメリカのいいなり状態です。

国内抵抗勢力に対しては、「農協組織はまだ抵抗しているから解体だ、株式会社化だ」と言ってJA全農を脅しています。

同じ協同組合のわが生協陣営は、かつて政府に対していち早く「消費者が安いものを手に入れるために関税を撤廃しろ」と要求し、「組合員のふだんの暮らしに役に立つ」安い農産物を輸入できるならばばかりに発言しないで静かにしているので解体の脅しも受けません。

医師会はTPP反対をトーンダウンしたから混合診療解禁をあついでに度で収めてやったと。

わが日本政府は、TPPに参加するためには国民の健康や安全も売り渡すという、主権のかけらもない状態に陥っています。(文責 大石)

本来、「おいしい」とか「食べて幸せ」という食が、添加物・農薬・ホルモン剤・放射能と次から次と、こんなにも「心配」しながら食べなければいけない時代というのはどこおかしいと思います。

こんな時代に生きて、私たち消費者・生産者が共に力と知恵と利用を寄せ合って、食と健康と生産と家計を守るための支え合いと利用結集を強めて生き抜かねばなりません。ここが踏ん張りどころです。

組合員と生産者が協同して安心の食づくり

10/3 ニッコーさんと冷凍食品の試食しながらの検討会・学習会

「冷凍食品」を選ぶとき、どんなところが「選ぶポイント」ですか？ 味？価格？内容？原料の原産地？

加工食品についての問題が何かと尽きない世の中、「なるべくお母さんの手作りに近く」をモットーに、シンプルな仕様の冷凍食品を製造するニッコーさんに来て頂き、使う消費者側からの意見や要望を出して生産者とともに改善や開発を共同ですすめます。市販の冷凍食品とも比較検討します。ぜひお誘い合わせのうえお越しください。



【日時】10月3日（金）10:00-12:00

【場所】守谷市 高野（こうや）公民館 調理室（2階）

【定員】20名（多数の時は抽選となります）

【申し込み】生協本部まで電話にて（050-5511-3926）

【持ちもの】筆記具、エプロン、台拭き（調理のお手伝いがあるかもしれません）

【会費】無料 ※保育はありませんがお子さん連れでも大丈夫です。



秋の仲間づくり強化月間・・・千葉の組合員さん手伝って！

10/4（土）流山市で常総生協を知ってもらうチラシ撒き大会！

仲間づくりにご参加ください！

10月4日（土）

職員総出で下記流山地区にチラシまきを行います。ぜひ組合員のみなさん中で一緒にできるという方がいらっしゃいましたらご参加願います。

【対象地区】流山地区（東深井周辺）

【時間】10:00～12:00

【集合場所】流山市内の指定場所

※供給担当までご連絡下さい！

★秋の強化月間 仲間づくり進捗

9月目標 44名に対して **21名** (9/18 現在)

生協への加入を呼びかけるラッピングトラック走ってます！



新しいおさそい職員が加
わりました！

新山さんと金崎さんです。
よろしくお願いします！

（次週紹介）

9/16 平和の集い 第1回実行委員会 報告

平和への 弁舌渦巻く 委員会 ～ 2014 実行委員を募集します！

11月30日(日) 9:30～11:30

『戦争って何？ 語り継ごうよ 子どもたちへ』 未来への贈り物「平和」

(会場) 牛久中央渉外学習センター



●平和の集い 第1回実行委員会 報告

前年の実行委員・牛久地区総代・理事さん各位の心意気がつながって、延びていた平和の集い開催への動きスタートですが、「平和の集い」？それって何？ですか？の質問で始まりました。

これで5年を迎える常総生協「平和の集い」です。今回は、前年開催時にニューギニア戦線の遺構集拝借から発展しました。もう一つはお孫さんの出来事から繋がりを見つけました。

・・・やんちゃっ子の孫が、学校で赤紙のことを習ったと言う。そしてその赤紙が来たら僕は戦争に行くしかないんだと。ずっと泣き続けて眠れなくなつて。

・・・でもね、平和を守ろう！戦争はしないよ！を願う大人もいっぱい居ると話し合った夏休みがあり、そして孫は決心した。・・・本番に続きます。

- ・戦争が起きてどうなったか、苦しむのはいつも市民。
- ・戦争は兵隊無しではあり得ない。

- ・憲法解釈問題、集団自衛権、いよいよ戦争に加わる？！外国での出来事なの？然り、他人事でない。どうなるかをよく考えヨッ。過去に学んでなどいない。武器輸出あり。B29は見えないけれどゲームみたいな高速戦争っていうじゃない。
- ・戦争って本当はどうだったんだろう？貴重なお話を聞きたいです。いろいろ見て聴いて自分で学んでいきたい。
- ・今何が必要なの！未来の子どもたちのために私たちは学び続けたい。
- ・常総の「平和の集い」消してはならず。開催に向けて努力しよう。
- ・人間捨てたもんじゃない。「平和の集い実行委員さん募集」をしましょう。

●実行委員さん募集！

ごいっしょしませんか！実行委員募集します。委員会は牛久市内です。

下記用紙にてご連絡下さい。

次回委員会開催は 10月14日(火)
10時—12時 (会場) 牛久市内

【お問い合わせ】 常総生協
TEL050-5511-3926 (担当: 村井まで)

キリトリ

●平和の集い2014実行委員に参加します

コース・班名

(組合員 No) お名前

ご連絡先 (tel 等)